

コロサイ人への手紙2章1-15節 「見かけの知恵と本物の知恵」

1A キリストにある知識 1-10

1B 心の励まし 1-5

1C キリストを知るための苦闘 1-3

2C まことしやかな議論 4-5

2B キリストにある歩み 6-10

1C 建て上げ 6-7

2C 空しいだましごとの哲学 8-10

2A キリストにある権能 11-15

1B バプテスマ 11-12

2B 十字架 13-14

3B 支配と権威の武装解除 15

本文

コロサイ人への手紙2章を開いてください。私たちは、パウロがあらゆる知恵を尽くして、コロサイの人たちが、キリストにあって成熟した者になってほしいと思って、諭し、また教えていることを読みました。そのために労苦しながら、奮闘しているという言葉で1章が終わっていますね。そこで2章で本題に入ります。

私たちが前回学んだように、私たちは世と、その中にいる、もろもろの霊の中から救い出されて、愛する御子の支配の中に移されました。そのため、成長が必要です。この世にいても、キリストにあって生きていくためには、揺るがされない信仰が必要です。信じる前に、世の教えに取り囲まれていました。そして信じた後も、同じ世に生き続けます。ですから、思いにおいて、キリストにある一新が必要です。そのために、パウロは労苦しているのです。続けて見ていきましょう。

1A キリストにある知識 1-10

1B 心の励まし 1-5

1C キリストを知るための苦闘 1-3

¹ 私が、あなたがたやラオディキアの人たちのために、そのほか私と直接顔を合わせたことがない人たちのために、どんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。

すでに学んだように、ラオディキアの町は、コロサイの町から近いところにあります。黙示録の七つの教会の最後の教会の町ですね。コロサイの教会に入ってきている異端が、ラオディキアの町にある教会にも入り込んでいたようです。そして、パウロは、直接顔を合せたことのないのに、そ

れでも、彼らのために苦闘しているということです。牢の中にいても、パウロはあたかも、その教会にるように、苦闘しているのです。彼はローマで牢獄の身ですが、ちょうどパソコンの前で、自分がまだ言ったことのない人々のために、メールを書いたり、ズームでビデオチャットしたりと、何とかして成熟してほしいと苦闘しているのと似ていますね。

² 私が苦闘しているのは、この人たちが愛のうちに結び合わされて心に励ましを受け、さらに、理解することで豊かな全き確信に達し、神の奥義であるキリストを知るようになるためです。

前回、奥義とは、私たちの中におられるキリストであり、この方が栄光の望みであると言っていました(1:27)。この方を知るために、まず苦闘しているのは、「愛のうちに結び合わされ」ることです。真の知識に達するには、それはインターネットの情報を集めて、知った気になることではないのです。その知識とは、キリストご自身なのです。愛に結び合わされるところに知識があります。ですから、みなさんがここに、教会として集まっていることは、その愛の結びつき自体がキリストを知るという学びになっています。そして、その結びつきによって、「心に励まし」を受けています。愛に拠る結びつきがるところには、聖霊がおられて、聖霊が心に励ましをくださいます。

そして、その励ましの中で、「理解することで豊かな全き確信に達し」と続くのです。心に励ましのない所での理解はないのです。知恵や知識と呼ばれているものがあって、それで心が恐れに満ちたり、罪意識が出てきたりするのならば、それは聖霊によるものではありません。そして、「豊かな全き確信」に達します。キリストについて知ることは、豊かな全き確信の中に見出されます。神を知ることは、知的に理解することでもないです。確信は、自分の理解を超えることがあります。感情で受けとめるものでもありません。全き確信のうちに、キリストを知ることができます。罪が赦されたことを、どうやって知っていますか？感情ですか？違いますね、全き確信です。それが豊かになるように、ということです。

³ このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています。

ここですね、コロサイ 1 章では、御子が万物の長子であられ、万物において第一の方になっておられることを見ました。その方において、知恵と知識の宝がすべて隠されています。私は、キリスト者になったばかりの時に、ここの箇所を読んで、「であれば、他の知識や情報を入れてはいけいないのか？」と思ったものです。イエス様のことばだけを聞いて、大学の授業での知識は無駄なのか？と思ったものです。けれども、そういうことではないです。この方を知っている、確信をもって知っている中で、学問においても、他の知識や知恵においても、その心がキリストに守られているので、誠実に見ていくことができる。時には聖書に照らして見ていくことができる、ということです。

そして、ここで、パウロは、コリントの教会に入って来たグノーシス主義のような考えに対抗して

いるのです。グノーシス主義者らは、洗練された知識の集合させたものが、救いには必要と考えていました。アポクルフォスと呼ぶ、彼らの書物に書き下ろしている知識を持つ必要があり、それは、一般の人にはそれを知ることが禁じられているのです。それで、パウロは敢えて、「隠されている」と書いているのです。彼らは、隠された知識があり、それを得ると救われるとしていたのですが、パウロは、「それらはすべて、キリストのうちにあるのだ！」と反駁しているのです。

ですから、みなさん、キリストにあつて全き確信を持ち、そこにある知識は、キリストのうちにいる人々にすべて開かれているのです。それは共有できるのです！パウロは、他の手紙でも、すべての聖徒たちという言葉をよく使います。すべての神の教会、すべての聖徒というように、キリストにある者にはすべて分け与えられているのです！「私たちは、真理を知っている。私たちのように考えていない者たちは、教会と言っても偽物で、まだ目が開かれてない、闇の中にいる。」ように考えている人たちからは、警戒して離れてください。そのような人たちが、すべてキリストにあつて一つになっている、そのすばらしい交わりに混乱をもたらし、分裂をもたらし、愛の結びつきを断ち切るのです。第一ヨハネを読めば、そういった者たちがヨハネたちから離れていく姿を見ます。それが、反キリストですね。

2C まことしやかな議論 4-5

⁴ 私がこう言うのは、まことしやかな議論によって、だれもあなたがたを惑わすことのないようにするためです。

なぜ、そのような知識や知恵と呼ばれているものに、入って行ってしまうのでしょうか？それは、「まことしやかな議論」だからです。惑わすという言葉もパウロは使っていますが、蛇がエバを惑わした時の言葉のように、不意が付かれて、その不意を突かれたところに、ばしっと嘘を吹き込みます。そして、神の言われていることに反することをを行うようにそそのかすのです。初めから、嘘をついて行けば、明らかに嘘だと分かりますから、拒むことができます。しかし、そう来ません、「まことしやかな議論」なのです。

そのような議論は、私たちが脆いとき、弱くなっている時に来ます。あるいは、弱いところ、脆いところにやってきます。アダムとエバの場合は、神から直接聞いたアダムではなく、アダムのついで聞いたエバにやってきました。ですから、そこをどのようにして防御を固めるか？ということです。そこで、パウロは次に、「信仰を堅くする」ことについて教えています。

⁵ 私は肉体においては離れていても、霊においてはあなたがたとともにいて、あなたがたの秩序と、キリストに対する堅い信仰を見て喜んでいきます。

パウロは、使徒として、霊的な知識が主によって与えられていたと考えられます。預言者エリシ

ヤが、遠くにあることも、手に取るように知ることができました。例えば、アラムの王が、イスラエル人を待ち伏する計画を立てても、それを事前に知って、イスラエルの王に伝えていました。王とその妻の寝台における会話でさえ、聞くことができたのです。そうした御霊の賜物、知識が与えられて、それで、コロサイの教会の姿を見ることができたのかもしれない。

それで、「あなたがたの秩序・・・を喜んでいます」と言っています。異端が入って来たというものの、まだ乱されていなかったようです。秩序があります。秩序は平和のためにとっても大切です。子が秩序ある家庭において、健全な人格形成がなされるように、教会に秩序があることによって、心が平和で守られ、養われるのです。そして、「キリストに対する堅い信仰を見て」と言っていますね。キリストに対する堅い信仰、この方こそ主であり、この方こそすべてだという、豊かな全き確信があれば、その信仰は堅固になります。

2B キリストにある歩み 6-10

1C 建て上げ 6-7

⁶ このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい。⁷ キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおりの信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。

主キリスト・イエスを受け入れて、そこにある堅い信仰を見たパウロは、今度はキリストにあって歩むことを教えています。受け入れたら、その信仰にしたがって生活する、歩むことが必要ですね。ここでパウロが強調しているのは、「キリストにあって」であります。いろいろな歩み方、生き方はできますが、すべてがキリストの内にあるようにそうしなさいと命じています。しばしば、偽りの教えに対抗するために、その偽りを暴くような情報サイトがあります。しかし、最も大きな防御は、キリストにある歩みであります。むしろ、そうした偽りを暴くということをしていながら、自分自身のよりどころ、キリストを見失って、自分も同じような偽りの中に入って行くことがしばしばです。

それで、「キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおりの信仰を堅くし」と言っています。自分自身が植物であるかのように、「根ざす」という言葉を使っています。これは、キリストから自分の生きる養分を受け取ることです。この方を、自分を生かす源とすることです。そして、今度は自分を家に喩えて、「建てる」と言っています。これは、いかにキリストを基として自分の生活を整えるか？ということ。また、教会の生活を整えるかということ。そして、家が建て上げられた時に、しっかりと補強が必要です。それが、「教えられたとおりの信仰を堅く」ということ。しっかりとその確信に留まり、何か違うことがやって来ても、さまよわないということです。

そうしたキリストにある歩みをすれば、自ずと感謝が出てきます。それをあふれるばかりにしなさいと、言っています！感謝に溢れることが、しかもキリストにあってあふれるばかりにするのが、私

たちにとって、偽りに対して最大の防御になります。

2C 空しいだましごとの哲学 8-10

⁸ あの空しいだましごとの哲学によって、だれかの捕らわれの身にならないように、注意なさい。それは人間の言い伝えによるもの、この世のもろもろの霊によるものであり、キリストによるものではありません。

先ほどは、「まことしやかな議論」とパウロが行っていましたが、ここでは、「あの空しいだましごとの哲学」であります。哲学とは、元々の意味は知恵を愛することです。このコロサイ書 2 章を見るだけでも、本当に、この町にはいろいろな哲学があったようです。今見ました、グノーシス主義の影響がありました。そして、もろもろの霊とありますから、神秘主義、あるいはスピリチュアルです。そして、割礼を施そうとしていますから、ユダヤ主義もあります。天使礼拝もあります。ユダヤ教の神秘主義も入っていますね。そして、つかむな、味わうな、触るなという言葉もありますから、禁欲主義もあります。肉体の苦行も行っていたようです。ともかくも、よりどりみどり、ごった煮でした。

これが、「空しいだましごと」と言っています。空しいと言っていますから、中身がないのです。何かいろいろなことをやらせますが、結局、何も残りません。それから、哲学と呼ばれて、まことしやかな議論であります。中身がない、現実ではないのです。そして、そうした哲学によって、「捕らわれの身」になるというのです。つまり、出てくるのがかなり困難になります。いわゆるカルトのよに、出てくるのがなかなかできなくなります。

例えば、これは例のただ一つですが、陰謀論はその類です。米国の大統領選の不正疑惑の時には、大規模な不正選挙が行われたとして、なぜかそれを、日本の教会の人たちが騒いでいました。そして、反ワクチンと反マスク運動です。一人一人が、ワクチンを接種すべきかどうか決めればよいわけですし、マスクも、もう間もなく室内でも自分の判断で決めてくださいと、政府が言っています。医学的な、公衆衛生的な判断だけの話なのに、実は、ディープステイトと呼ばれる、影の政府が、グローバリストらがいて、人口を減らすための計画を立てているのだとします。そして、ウクライナでの戦争は、ウクライナにナチスがいる、それと戦っているのだとする親プーチンの意見があります。これらはすべて、キリスト者たちもまた宣伝しているのです。これが、グノーシス主義に通じる考え方です。自分はこの情報を知っているが、あなたがたは知らないというものです。

有機農法というものもあるでしょう。これを食べたら体が犯されるといいます。食べるな、飲むなという禁欲主義と似ています。それから、こんな神秘的な体験をした、これを体験しなければ、あなたがたは何かもったいないことしている！ということ。それから、何かこれこれの規則を守らなければいけない、そうしないと霊的になれないとしたら、それは律法主義です。

これらが、「人間の言い伝えによるもの」だということです。神から来たものではなく、人間から来たものです。最近、今、陰謀論の考えを織り交ぜて、聖書の説き明かしをしたメッセージをしました。神からではなく、その人がどこかのサイトや本から仕入れた情報を元にして聖書を語っています。人間から伝え聞いたにしかすぎないものなのに、そういうことをします。

そして興味深いことは、これらが「この世のもろもろの霊による」とあります。一つの考えや教え、また力の背後には、もろもろの霊が存在すると当時の人たちは信じていました。当時の人たちが書いた文献には、歴史書を書いても神々の名が当たり前のように出てきます。すべてに神がいるという考えも問題なのですが、現代は物質主義が問題ですね。すべては物質によって成り立っていて、霊というものはないという哲学が、現代社会に満ちています。しかし、すべての目に見えることで、力あるもの、一つの教えなどの背後には、目に見えない、支配や権威と呼ばれるものが関わっているとも言えるのです。そして、この言葉は「幼稚な教え」とも訳せます。これは哲学について言えば、本当にそうだなと思います。あたかも高尚なことを唱えているのですが、実にくだらない、幼稚な教えを展開させているのです。

これら、空しいだましごとの哲学、また人々の教え、もろもろの霊において特徴的なのは、「あなたは、これこれをしなければ罰があたる」というものです。仏教でいうところの因果応報です。何か悪いことが起これば、あなたはこれこれの悪いことをしたからそうなったのだと言います。良いことも、自分が何かをすることによって良いことが起こるとします。人間の奥深くに、そのような考えがありますが、それは世の霊から来ているのです。人を恐れに陥れる霊なのです。この恐れや不安があるから、あらゆる教えにはまっています。

⁹ キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。

コロサイの人たちは、あらゆる霊の存在に仕え、それで完全へと向かおうとしていました。しかしパウロは、反駁します。キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形を取って宿っています。

グノーシスの教えでは、神は霊で、霊は善であり、肉体は悪であると考えます。神から離れれば神々は、それだけ霊性がなくなっていき、そして肉体にはもうその霊性は残っていないと考えたのです。それで、肉体の世界は悪であるとししました。霊肉二元論です。精神的な知識を持っていること自体が優れていて、救いを得られるという考えは、グノーシスの考え方に近いです。しかし、自分の肉体において行っていることを問わないのです。

これは、今の時代、情報化の時代に浸透している教え、哲学ですね。自分が知っているだけでそれでもう目的は達成されたかのようにあり、自分の肉体においてしていること、目に見えること、形あるものは、関係ないとします。自分の肉体で行っていること、その生活には霊的なことは関わ

らないのです。自分がネットで見た者は、その情報を得たらいかに自分もそれを会得したかのようになし、その当事者にはなっていません。いつも批評をしているだけであり、自分は関わっていないのです。

そしてグノーシス系の異端では、イエス様は、仮に現れただけで、肉体を持っていなかったとします。それにパウロは、反駁しているのです。イエス様は、いろいろな神性をもったもろもろの霊をすべて合わせたものよりも、神の満ち満ちたご性質を宿しておられ、しかも形をとって宿しておられるのです。だから、次に続きます。

^{10a} あなたがたは、キリストにあって満たされているのです。

ここが大事です。他の訳では、「キリストにあって完全なのです」とあります。キリストのうちに、神の満ち満ちたご性質が宿っているのですから、キリストを持っていけば、すべてを持っているのです。この方にあって完全なのです。満たされているのです。あたかも、キリストだけでは足りないとして、そういった人から来たものにしか過ぎない、いろいろな人による哲学を求めなくていいのです。

^{10b} キリストはすべての支配と権威のかしらです。

次の話題に移っています。今、いろいろな霊の話をパウロはしましたが、ここにある支配、権威は、霊の存在や天使の存在を指しています。彼らが、あらゆる教えの背後に、これらの支配や権威があると信じていることを思い出してください。しかし、それらの力は、すべてキリストの下にあることをここでは教えています。

2A キリストにある権能 11-15

私たちは知識や知恵だけでなく、力、権威を求めます。自分がどうしたら、良くなれるのか？その実行の力を望んでいます。それらはすべて、キリストに結ばれていることによって可能なのです。パウロは、そこで三つのことを語ります。バプテスマ、次に十字架、そして、十字架と復活にともなう、支配と権威の武装解除です。

1B バプテスマ 11-12

¹¹ キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨てて、キリストの割礼を受けたのです。

パウロは、ここで、コリントの異端の一つ、ユダヤ主義を取り上げています。割礼を受けることによって、あなたは契約の民になることができる。そして、数々の律法を守り行い、それでよいユダヤ教徒となって、神の国に入れるのだと考えるのです。これがいかに、力なきものか、幼稚な教え

であり、もろもろの霊に仕えているのと同じことなのかを、ガラテヤ書でも教えていました。「4:9 どうして、弱く貧弱な、もろもろの霊に逆戻りして、もう一度改めて奴隷になりたいと願うのですか。」

アブラハムに神が割礼を子供に授けることを命じられました。そしてモーセの律法にも、生後八日目に授けることが命じられています。しかし、同時に律法には、心の包皮を切り捨てなさいと命じられています。肉の割礼は、あくまでも心にある鈍さが切り取られて、御霊によって新しくされた心と思いが神に仕えるいうことを示しています。だから、肉における割礼を受けても、キリストによる心の一新がなければ、無意味なのです。

肉の割礼は、ユダヤ教にとっては死活的なものです。そして彼らはそれを誇っていました。そしてユダヤ主義という異端は、それを異邦人にも課して、彼らもそれを受けることによって信仰が完全になると教えられたのです。しかし、私たちこそが、人の手によらない、キリストにある割礼を受けたのだと言っています。そして、肉のからだ、つまり肉の欲望について、キリストにあって脱ぎ捨てることができるのだ、としているのです。それもそのはず、キリストこそがすべての支配と権威のかしらです。この方に結び付くことによって、御霊によって肉の働きを殺すことができるのです。

¹² バプテスマにおいて、あなたがたはキリストとともに葬られ、また、キリストとともによみがえらされたのです。キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じたからです。

キリストに結びついていることを象徴しているのが、バプテスマです。ユダヤ人たちは、このバプテスマもよく行っていました。しかし、イエスの名につくバプテスマというのが独特でした。この方が十字架につけられ、葬られて、そしてよみがえったということにつくのです。この方に結ばれて、キリストが十字架で死なれた時に、罪に支配された古い人が十字架に付けられ、死にました。そして、キリストがよみがえられた時に、私たちも新しいいのちにおいて生きることができます。これが、どんな力なのか、驚くべきことです。すべての支配と権威のかしらとなっておられる方に結ばれていることが、どれほどのものであるかを知ってください！

そして、この復活の力が、キリストの復活を信じたということだけで与えられるのが、この福音のすばらしさなのです。私たちが、なんだかよく分からない難しい哲学をこねくりまわしたり、割礼などいろいろな儀式なんかどうでもよいことになるのです！その復活を信じるときに、神がその復活の力を私たちに働かせてくださいます。

2B 十字架 13-14

¹³ 背きのうちにあり、また肉の割礼がなく、死んだ者であったあなたがたを、神はキリストとともに生かしてくださいました。私たちのすべての背きを赦し、¹⁴ 私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。

割礼を受け、律法を守ったら、自分が罪の力に打ち勝てるのではないかと期待するかもしれないのですが、そうではないのです。割礼がない時に、背きの中に死んでいたのに、イエスを信じる信仰だけで、キリストと共によみがえらせてくださったのです。

そして、十字架がしてくれたことは、なんと権能に満ちていることでしょうか！私たちを責め立てている債務証書、具体的には数々の律法ですが、これを抹消されました！そして、ご自身の十字架の上に、「ユダヤ人の王である」と書かれた罪状書きのところにいっしょにくぎ付けにくださったのです！罪を赦す権威が人の子にあると、中風の人を治される時に宣言されましたが、全能の神の権能をもって、このように罪の責めを、私たちから根こそぎ、もぎとってくださったのです！

3B 支配と権威の武装解除 15

¹⁵ そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。

罪を根こそぎもぎとってくださっただけでなく、今度は、これら自分たちを痛めつける、諸々の悪霊ども、支配と権威の力を無力化し、それを凱旋の行列の捕虜としてさらし者にしてくださっています。だから、私たちに対して、これらもろもろの霊は、何ら力をもたないのです。このように、主は今も、霊的に私たちを悪魔から守ってくださっているのです。

これでおわかりでしょうか？キリストの内にいることが、この方に結ばれていることが、どれほど力強いことか！ということです。キリストのすばらしさをあがめ、私たちはこの方の前にひれ伏し、聖霊に触れられることが、何よりも最も大事なのです。そこに必要なのは、信仰です。主は、信仰を通して働かれ、復活の力を、十字架の力を、悪霊どもを制圧している力を注いでくださいます。